



東海道五十三次—知られざる穴場—その⑬

関宿を出てしばらく1号線を歩いていたところ、斜め右前方に古道らしき細い道があった。迷わず入って行くと道の右側に、「名勝筆捨山」の標柱があった。広重が、「坂之下・筆捨嶺」として描いている名山である。ますますこれが旧東海道だと信じて、結果的には半日を棒に振る大失態を演じてしまった。多くを語るまい。旧東海道でなく迷道であった。



(歌川広重 坂下宿)

再び1号線の元の地点に戻り、少し先の右に流れていた鈴鹿川が左側に転じる辺りで右手の旧道に入っていくと、鈴鹿馬子唄会館が。ここが実質的な坂下宿(48番目)の入口であった。会館を見学した後、先ほどの大チョンボの余韻を引きずりふらふら歩いていると、車の人に呼び止められた。二三のやりとりでこの方のお眼鏡に叶ったのか車を自宅に置いて、私が一服していた法安寺まで来て下さった。「正調鈴鹿馬子唄保存会」会長の鶴飼さんという方で、坂下宿の歴史をお聞き出来た上に、「正調鈴鹿馬子唄」の楽譜と歌詞、それに「正調鈴鹿馬子唄」のテープまで頂けた。まさに「禍福は糾える縄のごと」き日になった。

坂下宿の寂れ方は尋常でない。大きな旅籠が軒を連ね、本陣・脇本陣の規模も東海道有数の宿であった(鶴飼さんの言)というのに、それらの跡地に建物すら建っていない。小竹屋脇本陣跡、大竹屋本陣跡、梅屋本陣跡、松屋本陣跡等はすべて路傍に、小さな碑のみ。陸の孤島のなせる業か。鶴飼さんに頂いた鈴鹿馬子唄の歌詞に、「坂の下

では大竹小竹、宿がとりたや小竹屋に」とあるのは、上記の大竹本陣と小竹脇本陣。「大竹屋には一般客は泊まれないが、せめて小竹屋脇本陣に一度は泊まってみたい」という庶民の夢を托した歌詞。

坂下宿外れの片山神社からいよいよ、八町二十七曲と呼ばれる鈴鹿峠道が始まる。でも上り終わった感想は、さほどの難所ではなかった。思うにこの峠道、坂上田村麻呂の大昔から山賊が跋扈することでの難所だったのではないか。そう思って峠から左に分岐する道を辿って「姿見の鏡岩」まで足を延ばしてみた。山賊が旅人を襲う時に、鏡代わりに利用した岩である。元の道に戻って少し行くと峠の表示。「左三重県伊勢の国 右滋賀県近江の国」とある。右近江の国は茶畑とともに始まった。そこに、「歴史の道東海道 江戸←土山→京大坂」の道標。少し進むと巨大な万人講大石灯籠、続いて1番の歌詞を記した「鈴鹿馬子唄」碑。この歌詞にちなむように広重の図も「土山・春之雨」。春雨らしくない太い雨脚で垂直に降っている図柄。幸か不幸か、名物の「間の土山雨が降る」とはならなかった。



(歌川広重 土山宿)

田村神社に参拝した後、土山宿（49番目）に入った。遺跡の在り処が詳しく記されている「東海土山宿案内図板」を皮切りに、一里塚跡、問

屋場跡、土山宿本陣跡、脇本陣跡、大黒屋本陣跡、高札場跡、陣屋跡を始めすべての旅籠跡、商家跡等が短い宿場内に犇っていた。旅籠屋の中には「森白仙終焉の地 井筒屋跡」の碑も。森鷗外の祖父が津和野藩主に従って帰国の途中発病、万延元年（1860）に亡くなった旅籠屋。ここがなくなっていたので、鷗外が祖父の墓探しに来た時泊ったのが旅籠平野屋。母の遺言で祖父母、母の遺骸を葬ったのが宿内の常明禅寺。後年、鷗外の子孫が津和野へ持ち帰った由。鷗外の墓碑は東京三鷹の禅林寺に、遺言通り森林太郎名で、太宰治の墓碑と向き合うようにして建つ。桜桃忌には花束で埋まる太宰の墓前に比して、本名の林太郎墓の参拝客はほぼ皆無。

土山宿を抜けて水口宿に向かう途中にも、「史蹟 垂水頓宮跡」や関連の歴史的価値のある遺跡が散在。水口町への入口に早くも「水口宿」という大きな標識が建ち、続いて水口宿一里塚、「岩神のいわれ」説明板、『伊勢参宮名所図会』からの引用文と図板等が建ち、やがて冠木門が見えて来てここが東見附跡。いよいよ水口宿（50番目）。



(歌川広重 水口宿)

50番の大台に乗ることでゴールが見えてきた感じ。宿場に入ってすぐに水口宿鶴飼本陣跡があり、その先で道は三筋の通りに分かれる。真中の

道が東海道だが宿場町兼城下町のこととて、往時は三筋の通りの両側に旅籠や店が軒を並べていた由。真中の道を行くと間もなく、問屋場跡。その先の四つ角には新しい時計塔が建ち、毎時ゼロ分に囃子に合わせて祭半纏を着た人形が踊り出てくる仕掛けになっている。そう、現水口町にはほぼ各字毎あざに山車（曳山）の収納庫があるほどの、名うてのお祭り好きの土地柄なのである。

先ほどの四つ角を右折して突き当たると大岡寺。参道には「鴨長明発心所」の碑。境内には、「命二つ中に生きてる桜かな」の芭蕉句碑。『野ざらし紀行』の旅の途次、水口にて20年ぶりに服部土芳と再会して詠んだもの。真中の道に戻って進むと近江鉄道の踏切りの手前で三筋の道が合流する。踏切りを渡って進むと、「水口城天王口跡」の説明板と、柵形の東海道を矢印で示した図板。矢印に従って右折し行き止まりを左折して、柵形のほぼ中央まで進むと我が生家、心光寺の門が見えてくる。

半ば若気の至りで、長男でありながら往時の藩主の菩提寺であった名寺を捨て、親を捨てた私が今、その心光寺の門前に来ているのだ。種田山頭火に、「雨降るふるさとははだして歩く」という句がある。例え行乞行脚の途中に通り過ぎるふるさとしろ、汚れた草鞋を履いては歩けなかった。まったく同じような感慨を抱き、威儀を正して通り過ぎた。

そのまま進み突き当たりを左折し、元の道を通り越せば水口城、別名碧水城。元の道手前で右折

して突き当たりまで進むと、五十鈴神社。角に林口一里塚跡。この辺りが水口宿西見附跡。この突き当たりを左折してすぐ右折すれば、柵形を抜け出て元の道に戻る。

元に戻った道はその後、「北脇繩手」の説明碑のある前を通り、真直ぐ西に向かう。道はやがて、「左水口宿、右横田渡」の道路標示を経て野洲横田（現野洲）川に突き当たる。手前に水口町最後の泉一里塚跡の標識。横田渡船場跡には冠木門と自称日本一大きい「横田の渡し大常夜燈」がある。幕府が橋を架けることを禁じた、東海道13の渡しの内の1つがあった所。今もここに橋がなく、かなり下流まで言って1号線の橋を渡らねばならない。橋を渡れば甲西町（湖南市）。渡り終えたJR三雲駅前の道を右折するのが東海道。左折すれば先ほどの続きの渡船場跡の碑。碑の前でさらに右折して坂道を上ってゆくと、「天保義民之碑」。東海道に戻って西に進むと、大沙川トンネル。トンネルの上が川で、下が東海道になっているいわゆる天井川。トンネルを潜った左側に、「弘法大使錫杖跡」碑と弘法杉。その先に夏見立場跡碑。2つ目の天井川である由良谷トンネルを潜ってから東海道を外れ、案内板に従って左折して山道を上れば、「天然記念物平松のウツクシマツ自生地」。主幹がなく根元から幹が幾つにも枝分かれした松が200本以上自生している。東海道に戻る。

